

# 甲南女子大学本『源氏物語 梅枝』翻刻

米 田 明 美

甲南女子大学図書館（以後本学と称す）に所蔵されていた伝為家筆『源氏物語 梅枝』は、今まであまり世に知られることのなかった本であった。大内英範氏（注二）により一度調査研究が行われた程度で、主に人物呼称の異同が示されている。今回この本を詳細に再調査する機会に恵まれ、多くの研究成果を見出すことができたので、まず（一）書誌と（二）翻刻を提供したい。

## （一）書 誌

本書は、縦一五・四種、横一五・六種の枡形本。一冊。列帖装。二括り。  
表紙は深緑色金雲柄の緞子で、見返しは一面金箔。表紙は江戸時代の装丁で、原表紙が中に隠れているか。また原裏表紙は二括りめの最後に存する。外題・内題はない。  
一括りめは十枚。表紙、遊紙一丁、墨付は二丁めから十八丁めまで。二括りめは九枚。十九丁めから墨付最終行は三十三丁で、後遊紙三丁と源裏表紙一丁。  
遊紙一丁裏左上に「勝安芳」（勝海舟）の蔵書印があり、最後の墨付の裏右下に「沙原文庫」の蔵書印。他に遊紙一丁裏右下隅に「香稚之（三文字め判読不明）蔵」の蔵書印もある。  
紙は鳥の子（斐紙）。書写年代は、田中登氏によると鎌倉中期後嵯峨院時代の書写と推定され、書写者はおそらく男性であろうとのこと。和歌は地の文と同じ高さから書かれ、一字下げなど行われていない。和歌の後、次の文は改行されている。一面九行書きで、合点・朱筆はない。

黒漆の箱に収められ、中央に金で「梅がえ」の字。箱中の本書を包んでいる白布に、「勝海舟」と「河内本」という墨字あり。  
古筆了任・了延による「為家卿筆」と記された極札が、各一枚計二枚付されている。

## （二）翻 刻

### 凡例

- 一、この翻刻は、甲南女子大学蔵『源氏物語』梅枝巻を、原本に基づいてできる限り忠実に翻刻したものである。
- 一、翻刻するにあたっては、次の方針に従った。
  - (1) 漢字・仮名の区別をはじめ、仮名遣い・当て字・送り仮名等は、すべて原本通りに活字化した。
  - (2) 漢字の字体は、原則として通行の正字体を用いた。
  - (3) 仮名はすべて平仮名とし、本文中の「ハ」「ニ」等の片仮名による助詞の表記もすべて平仮名に改めた。
  - (4) 誤字・脱字・衍字等はそのまま記し、特に注記は加えなかった。
  - (5) 句読点や濁音表記は一切施さなかった。
  - (6) 「〱」「〱」等の踊り字の符号は、原文通りのものを用いた。「〱」の場合、一文字分であっても平仮名の「く」との区別のため二文字分使用している。
  - (7) 見せ消ちはすべて「三」記号をその文字の左側に記し、訂正補入文字があれば

ば右側にポイントを小さくし記した。

(9) 補入は、補入記号のある場合もない場合も、原本通りの体裁に示した。

(10) 重ね書きによる訂正は、下の文字が判読できる場合はその文字に||を付し、右横の上に書かれた文字を示した。判読できない場合は、「・・」で示し、同じく右横の上に書かれた文字を記した。

(11) 丁数は、原文の本文が開始する丁を第一丁とし、原文の丁の表・裏が終るごとに、「一オ」「一ウ」と、その行の上の欄外に記した。

一、和歌について改行はされているが、字下げが行われていないので、和歌の上欄外に「\*」を付した。

### 梅がえ(黒漆の箱の題)

一オ 御もきの事おほしいそぐ御

こゝろをきてよのつねならす春宮

をなし二月に御くゑんふくの事

あるへければやかて御まいりもち

つゝくへきにやあらんむつきのつ

こもりかたになればおほやけわた

くしのとやかになりぬるころほひ

たきものあはせさせ給とて

人かうとものたてまつれるかうともこゝろ身に

一ウ いにしへのものには猶おとりてやあ

らんとおほして二条の院の御くら

あけさせ給てからのものともとり

わたし御覧ししくらふるににしき

あやともこまかになつかしき事は猶

ふるものこそ事なりけれとてち

かき御しつらひのもの、おほいし

きもの、御しとね何やかやのもの、

二オ

はしとものれうにこゑんの御よの

はしめつかたこまうとのまいれ

りけるあやひらんともたくいゝまの

よのものにゝすすくれたるなどを

さまくに御らんしあてつとへさせ

たまひてこのたひのあやうす

ものなとは女房のれうなどにて

たさせ給つかうともなとむかし

いまよりならへつゝ御方くにくはり

たてまつり給ふふたくさつゝさせて

ときこゑさせ給へりをりものとも

かむたちめの六なにかとよにな

きさまにうちにもとにもしけく

いと身たまふにそえて方くにこ

のかうをえりとゝのへてかなうす

のをとみゝかしかましきころなり

おとゝはしん殿にはなれをはしま

してそわうのいましめの二のほ

うをいかてかおほむみゝにはつたへ

たまひけん心にしめてあはせ

給うゑはひんかしのたいの中将の

はなちてにて御しつらひことくにふ

かくしなさせ給てしたしうさ

ふらふ人くあまたならす八条の式

部の宮の御ほうをつたえてかたみに

いとみあはせたまふほといみしうひ

きかくしたまへはにほひのふかさあ

さゝもかちまけのさため有へしと

二ウ

三オ

## 三ウ

おとゝのたまふ人の御をやけなき  
 あらそひこゝろなめり御てうとゝも  
 のきよらをつくしたまへる中に  
 もかうこのはおほむはこ  
 どものやうつほとものすかたひと  
 りのこゝろはへもめなれぬすちに  
 いまめかしうやうかへさせ給へるに  
 方〱の御心をつくしたまへらん  
 にほひかともをかきあはせて

## 四オ

いれんとおほすなんめりきさら  
 きの十日あめすこしふりて  
 御まへちかき紅梅のさかりに色も  
 かもにるもの穉なきにひやうふき  
 やうの宮わたり給へり御いそきあす  
 になりけりことゝふらひきこへ  
 たまふむかしよりとりわきたる  
 御中なればへたてなくその事かの  
 こときこへあはせたまひなとして  
 はなのかほめてつゝおはしますほとに  
 さいあんよりとてちりすきたるむ  
 めのえたにつけたる御文もてまい  
 れり宮きこしめす事あれは

## 四ウ

いかなる御せうそのすゝみまいれる  
 なるらんとをかしとおほいたりいとなれ〱  
 しき事申つたりしをまめ  
 やかにいそきたまへるとおほむふみは  
 ひきかくしたまへりちんのはこに  
 るりのつき二すゑておほきに

## 五オ

## 五ウ

まろかしつゝすゑたまへりこゝろはゝ  
 こむるりにはこえふのえたにしろ  
 きにはむめをえりてをなく  
 ひきむすひたるいとすゑもな  
 よひかになまめかしくそしなし  
 たまへるやえんなるものゝさまかなとて  
 御めとめたまへるに

## 六オ

\*はなのかはちりて枝にもとまらねと  
 うつさんそてのあさくしまめや  
 ほのかなるを御覧しつけてみこは  
 こと〱しくすしなし給さい将の中  
 将は御使たつねとゝめさせていたう  
 ゑはしたまふ紅梅かさねのほそなか  
 そへる女のさうすくかつけたまふ  
 めり御返もそら色のかみに御まへ  
 の花をらせ給へはいとうちのこゝろ  
 おもひやらの御文のなに事のかく  
 かくろえるふかくかくしたまふと  
 うらみていとゆかしとおほしたり  
 何事か侍らんくま〱しくおほしなす  
 こそくるしけれとて御すゝりのつ  
 いてに

## 六ウ

\*はなの色にいとゝこゝろをしむるかな  
 人のかむるかをはつゝめと  
 とやありけんまめやかにはすき〱しき  
 やうなれとまたもなかんめる人の  
 うゑにてこれこそは事はりのい  
 とな身なんめれとおもふたまへな

## 七才

してなんいとみにくければうとき  
 人にはかたわらいたさに中宮にまかせ  
 たてまつりて侍したしきあい  
 たなれきこゑかよへとはつかしきかく  
 ふかくおはする宮なれば何事も  
 よのつねにてみせたてまつらんはかた  
 しけなくなとかたらひきこゑ給  
 あえものもにけなき事なりけりと  
 事はり申給ふさてこのつゐてに

## 七ウ

御方〜あはせたきものをの〜に御  
 使してこのゆふくれのうちにくろ  
 みむときこゑたまへればさま〜に  
 をかしうしなしつゝたてまつれた  
 まへりこれわかせ給へたれにかみせん  
 とときゑ給て御火とり二して  
 こゝろ身給する人にもあらずやと  
 ひけし給へといひしらぬにほ  
 ひともすこしをくれたるひとく  
 さなとかいさゝかのとかをわきまへあな  
 かちにおとりまさるけちめをゝき給  
 我御わたくしのはいまそとりいて  
 させ給うちのみかは水のほとりにな  
 すらへてにしのわた殿ゝしたより  
 いつる水きはちかうゝつませ給へるを  
 これみつの宰相のこの兵衛の  
 せうなるほりてまられるあけさせ  
 給てさい将の中將つたへたてまつ  
 り給にくるしきはんさにもあたりて

## 八才

## 八ウ

待かいとけふしやとなやみたまふを  
 なしほうこそはこゝかしこにおのつから  
 ちりつゝひろこるへかんめるを人  
 人の御こゝろ〜あはせたまへるとけ  
 うあることおほかりさらにいつれとも  
 なき中にさいるんのくろほうさいへと  
 ふかくこゝろにくゝしつかなる  
 けはひ事なり侍従はおとゝのを  
 そすくれてなつかしくいまめか  
 しきかなりとさため給たい

## 九才

のうゑの御分はみくさある中にはい  
 花あさやかになまめかしうすこし  
 心はへをそえてめつらしきかほくはゝれり  
 このころのかせにくはへんにこれにまさ  
 るにほひあらしとめてたまふ夏  
 の御方は人〜の御こゝろにいとみ給なる  
 中にかす〜にしもたちいてすやと  
 けふりをもひきえ給へる御こゝろに  
 てたゝかえふを一くさはせ給へるさ  
 まさまかはりしめりたるかして  
 あはれになつかしふゆの御方時〜に  
 よれるにほひのさたまれるにほひに  
 けたれんはあやなしとおもひてくの  
 えかうのほうのなかにすくれたるは  
 さきのすさく院のことにそえさせ  
 たまひてきむたゝのあそんの事に  
 えらひつかふまつりし百ふのほう  
 などをひえてよにふりぬにほひ

## 九ウ

## 一〇オ

事になまめかしうとりあはせたる  
こゝろおきてすくれたりとみなも  
とくなくいつかたをもさため給へは  
こゝろきたなき御はん小みさなめりと  
きこえ給月さしいてぬれはおほんみ  
きなとまiori給て御ものかたりなと  
し給ふかすめる月のこゝろにくきに  
雨のなごりかせすこしうちふきて

## 一〇ウ

はなのかなつかしきにをとゝの御あたり  
はいひしらすにほひみちて人の御心と  
もえんなりくら人ところのかたにも  
あすの御あそひのならしに御事とん  
のさうすくして殿上人あまたつと  
いてをかしきふゑのねきこゆ内  
大殿、頭中将弁の少将はかりにて  
まかつるをとゝめさせたまひて御  
ことゝもめす宮の御まへにひはを  
とゝにさうのことまいりて頭中将にわこ  
むたまはりてはなやかにひきたる  
程ちゝをとゝにをとらすいとをもし  
ろうきこゆ宰相の中将よこふゑふ  
きたまふをりにあひたるてうし  
雲居とをるはかりふきたてたり  
弁の少将ひやうしとりて梅のえ  
いたしたるこゑいとをかしわらはにて  
いふたきのたかさこうたいし君  
宮もおとゝもさしそへ給てことゝ  
しからぬものからをかしき夜の

## 一一オ

御あそひなり御かはらけまいるに宮  
うくひすのこゑにやいとゝあくかれ  
ん心しめつるはなのあたりに  
ちよもへぬへしとのたまへは

## 一一ウ

\*色もかもうつるはかりに此春は  
はなさくやとはかれすもあらなん  
頭中将にたまふとりてさい將の  
中将にさす

## 一二オ

\*うくひすのねくらの枝もなひ  
くまでなをふきとをせよはの  
ふえたけ  
さい將

## 一二ウ

\*こゝろありてかせのよくめるはな  
のえにとりあえぬまでふきやよるへき  
なさけなくやとてみならひたま  
ひて弁の少將  
\*かすみに月とはなとをへたてす  
はねくらのとりもほころひなまし  
まことにあけかたになりてみこ返  
たまふ御をくりものに身つからの  
御なをしの御そひとくたりけふて  
ふれたまはさりつるたきもの二つほ  
すゑて御車にたてまつれ給宮  
\*はなのかほえならぬそてにうつし  
もて事あやまりといもやとかめん  
とあれはいとくしたりやとてわらひ  
たまふ御くるまかくるゝほどにおいて  
\*めつらしとふるさと人もまちそ

## 一三才

みんはなのにしきをきて返君  
 またなき事とおほさるともとあれ  
 はいといたうわらひねたかり給つき  
 のきむたちにことしからぬさま  
 にほそなかこうちきなとかつけさせ  
 給かくて西のおとくにわたしたて  
 まつりたまふ宮のをはしますはな  
 ちてをしつらひて御くしあ  
 けのないしなともこなたにやかて  
 きたの方も宮に御たいめん有  
 御方〱の女房ともをしあはせ

## 一四才

たるかすしらすみえたり子時  
 にて御もたてまつる御となあ  
 ふらほのかなれとけわひいとめて  
 たしと宮もみたてまつり給をと、  
 のおほしすて給ましきをたの  
 身にてなめけなるすかたをす、  
 み御覧んせさせ侍にをのちのよの  
 ためしにやとこゝろさはくおもふ  
 給うるときこゑ給いかなる事とも  
 思わき侍らさりけるをことしう  
 とりなしおほすになん中〱心をか  
 れぬるをひとことのためひつけほと  
 いとわかかうあいきやうつきたるに  
 けをかしき御けはひとものさし  
 つといたまへるを、もふやうなりとお  
 ほすは、きみのかゝるをりた、かえみ  
 たてまつらぬをいみしう思ひたり

## 一四才

## 一四ウ

しを心くるしうおほしてまうの  
 ほせやせましとおほせと人のものいひを  
 つ、身給てすくし給つかゝる  
 ところのきしきはよろしきた  
 にいと事おほくうるさきをかた  
 はし對としとけなからんも中〱  
 なれは宮の御くゑんふくは廿日  
 なりけりいとをとなしうをはしま  
 せは人の御むすめともきをひまいらせ  
 んとこゝろさし思ひ給されとこのを  
 と、のおほしいきさすさまのいとま  
 なるになか〱にてやましらはんなど  
 おほし、めりぬるをきこしめし  
 ていと大〱しき事宮つかへのすちは  
 あまたのあまねき中にすこし  
 けちめをいとむこそほいなれそこ  
 らのきやうさくのひめ君たちを  
 ひきこめられなはよにももの、はへ  
 あらしとのたまふておほむまい  
 りのひつき〱にもなとてつとめ  
 たまふをき、給て右大との、  
 三の君まいり給ぬれいけい殿とき  
 こゆこの御方はむかしの御と〇いところ  
 しけいさをあらためしつらひて  
 ほとをのへたまひつる事を宮も心  
 もとなけにおほしのたまえつ  
 れは四月にとさため給つ御てう  
 と、も、あるより事に事をそへて

## 一五才

## 一五ウ

一六オ

御身つからも、の、したかたゑやうな  
とを御覧んしいれすぐれたるもの、  
さうすともをめてこまかにみかき  
と、のへさせ給さうしの御はことも  
にいるへきさうしものやかてて  
本にもし給つへきをえりたま

ふいにしへの上なき御てとも  
よになくなをのこしたまへる

た、人とものおほくさふらふよ  
ろつの事昔にはおとりあさく

一六ウ

なりゆく世のすゑなれとてなん  
いまのよにはいときはなくかしこく  
なりにたるふるきあとはさた  
まれるようにひろきこゝろゆかす

一すちにかよひてなん有をた  
つきをかしき事はとよりてし

もこそかきいつる人もありけれ  
女のをこゝろにいれてならひし

さかりにけしうはあらぬてほん  
ともおほくあつめたりし

一七オ

中に中宮の御は、宮すところ  
の心にもいれすかき給へりし

ひとくたりわさとならぬふくむ  
きはことにおほえしはやさて有

ましき御名もたてしそかし  
くやしき事は思にくみ給し

かどさしもあらざりけり宮に  
かくうしろみつかうまつる

一七ウ

こゝろふかゝりしなき御かけには  
みなをし給らん宮の御てはこま  
かにをかしけなるにかとやをく  
れたるとうちさゝめきてきこゑ

たまふこの入道の宮の御てはいと  
けしきふかくなまめいたるすちは

ありしかとよはきところつきて  
にほひそすくなかりしないしの

一八オ

か身こそいまの上すそのし給へと  
あまりそをれてくせそゝいため  
るさはあるとかの君とせんさい院  
とこゝにこそかき給はめとゆるし

きこゑ給へはいたうなすかし給そ  
このかすにはまはゆやときこゑ

給へはにこやかなるなつかしさは  
事ならんものをまんなのすゝ

みたる程にかむなはしとけな  
きもしこそまさるめれとて

一八ウ

またかゝぬさうともつくりくわへ  
へうしひもなといみしうせさ  
せたまふ兵部卿の宮右衛門督な  
とこそはものせめこゝにはひとよろひは

かくへしけしきはみいまの  
すちふともえかきならへしはやと

我ほめをし給すみふてなら  
ひなくえりつゝれいのところゝにたゝ

一九オ

ならぬ御せうそこともあれば人ゝ  
いとかたき事とおはしあえるは

かへしまうし給事もあれは

まめやかにきこゑつけ給こまのか見  
のうすやうたちたるかせめて

なまめかしきをさうしきをこの

ものこのみするわかき人みむとて

宰相の中将式部卿宮大殿、弁

の少将あして歌を思ひに

かけとをしへ給へはみないとむへ

かんめりれいの新殿にはなれ

をはしてかきたまふはなさかり

すきてあさみとりなるその

うらゝかなるにふるき事とも

なとおもひすまし給て御ころ

のゆくかきりさうのもたゝのも

めてたくいみしくかきつ

くし給御まへの人しけからす

女房二人はかりすみなとすらせ

たまふてゆへあるふるきしふ

ともうたいかにそやなとえりいて

給にくちをしからぬかきり候

みすあけわたしてけうそくの

うゑにさうしうちをき

はしちかうちみたれふてのし

りくはへおもひめくらしたま

えるさまあくよなくめてたし

しろきかみあかきなとけち

えんなるひらは心ちしてふてと

りなをしなとようゐし給へる

二〇ウ

さえみし覧人にはみせまほしき

御さまなり兵部卿わたり給とき

こゆれはおとろきておほむなを

したてまつりをましよそ

ひてはへさせ給てやかてまちとり

いれたてまつらせ給この宮もいと

きよけにてみはしさまよく

あゆみのほり給ほとうちにもとにも

人しきのそきてみたてまつるうち

かしこまりてかたみにうるはし

たち給へるもいとよけなりつ

れしにこもり侍るほとくるしきまで

おほえはへるころのとけさにをりよく

わたらせたまへるとよろこひきこえ給

宮も御草子もたせてわたらせ給

へり御らんすれはすくれてもあら

ぬてをたゝかとしういとめて

たうすみふてすみたるけし

き有てかきなし給へりうたも

事さらめきそはみたる事

ともをえりてみくたりはかりなとも

しすくなにあさましうそきか

き給へりおとゝみたまへおとろき

ぬかくまては思たまへかけすこそ

有つれさらふてなけすて

つへしやとねたかり給かゝる御

中におもなくゝたすふての

ほとさりともしなんおもふたまふる

二二ウ

二二ウ

二二ウ



## 二二ウ

なとたはふれ給御草子ともかく  
し給ふへきならねはとりいて  
たまひてかたみに御らんすから  
のかみのいとすくみたるにさうかき  
たまえるをかしこくたくひな  
しと御らんするにこまのか身  
のはたへこまかにならへなつかしき  
かたんのいろなどははなやかならて  
なまめかしきけしたるに女の  
てのうるはしくこゝろとめてか  
きたまへるはたとへんかたなし  
みたまふ人御なみたさへ水くき  
なかれそふ心ちしてあく夜  
あるましきにまたくのかむ  
やのしきしのにこやかに色

## 二三オ

あひはなやかなるにみたれたる  
さうのうたをふてにまかせて  
さうときかきたるみところか  
きりなしゝところもとろにあ  
いきやうつきかきなし給へる  
みまほしければさらにのこりとも  
にめも見やりたまはず衛門のか  
みのはをゝしくかしこけなるす  
ちをこのみかきたれとふての  
おきてすまぬ心ちしていたはり  
て侍けしき也歌なとも事さら  
めきていそきかきたり女の  
御てともはまほにもとりいて給はず

## 二三ウ

## 二四オ

さい院などはたいしたたてたまはず  
あしてのさうしもそこゝろゝに  
はかなくをかしき宰相の中將  
のは水のいきほひゆるゝかにかき  
なしそかれたるあしのをいさま  
なとなにはの浦にかきかよひて  
いたうすみたる所有またいとな  
まめかしうひきかへてもしや  
うとりいしなとやうのたゝすまひ  
なとこのみかいたるひらんありめ  
もをよはすこれはいとゝまいるへき  
ものかなとけうしたまふ何事  
もゝこのみしえんにおはする  
御こにていといみしうもてはやし  
きこえ給けふはまた此事とも  
をのたまひつくしてさまゝなる  
かみの本ともふるきあたらし  
きとてせさせたまへるついでに  
御子の侍従の君して宮にさふら  
ふほんとりにより給さかのみかとのえら  
ひかゝせたまへるほん四卷えんきのみかとのえら  
まきゝからのあさはなたのかみを  
つきてをなし色のこきもん

## 二四ウ

のきのへうしおなしたんのか  
らくみのひもなとなまめかしう  
てまき事におほむてのすちをか  
へつゝいみしうかきつくさせ給  
えり御となあふらみしかくまいり

## 二五オ

## 二五ウ

て御覧するにいとつきせぬもの  
かなこのころの人はたゝかたそは  
をけしきはむにこそはありけれ  
なとめて給これはめとゝめ

たてまつり給はこなとはへらま  
しにたにをさゝみはやすまし  
からむなとはつたふましき

をましていたつらにくちぬへきに  
なんなときこゑたまふ侍従の君  
にからの本ともいとわさとかまし  
きちくゝをちんのはこにいれて

## 二六オ

いみしきこまふえそへてたて  
まつり給このころはたゝこのかん  
なのさたをし給つゝ世中にてかく  
とおもえる中下の人ゝもさるへきも  
のともおほしはからひてたつねか

かせ給かの御はこのうちにはた  
ちくたれるはませたまはす事ゝ  
わさと人のほとゝにみなしなゝに

## 二六ウ

わかせたまへりよろつにめつら  
かなる御たからの人みかとにきて  
の有かたけなる中に此ほんとへも  
なんいふかしとみなこゝろおき給  
わか人よにおゝかりける御系なとゝのへ  
たまふ中にもかのすまの日記  
はのちのすゑにもつたへしらせ  
たてまつらんとおほせといますこし  
よをもおほしゝりなんにこそと

## 二七オ

おほして猶とうて給はすうちの  
をとゝはこの御いそきを人のうゑにて  
きゝたまふもい見しうこゝろも  
となうくちをしとおほすひめ

君は御有さまさかりにとゝのひまさ  
り給てあたらしうゝつくしけ

## 二七ウ

なりつれゝとうちしつめ給へる程  
いみしき御なけきくさなるにかの  
人の御けしきはなをいつとなくな  
たらかなれはこゝろよはうすゝみよ  
覧んも人わらへに人のねむころなり  
しきさ見になひきなましかはと  
人しれすおほしなけきて

ひとかたに御身をもおほせ給はす  
かうすこしたわみたまひえたる  
御気色を宰相のき見きゝ給へり

しはしつらかりし御こゝろはえも  
心うしとおもへはつれなく思しめ  
てさすかにほかさまのこゝろなとつくへ  
くもおほえす心みかてらたはふれ

## 二八オ

にくきことおほかるにあさみとり  
きこゑこちし・めのとゝもなとに  
なう言にのほりてみえむの御心  
ふかゝるへしおとゝはあやしうゝき  
たるみありさまかなとおほし  
なやみてかのあたりの事思たえ  
にたらは左のおとゝ中つかさの宮な  
とのけしきは見いわせ給なるをいつ

## 二八ウ

かたにも思きためられねとのたまへ  
 とものもきこゑ給はすかしこまりて  
 さふらひ給かやうの事はかしこき  
 御をしへにたにしたかふへくも  
 おほえさりしかは申さまうけれど  
 いまおもひあはすれはこの御をし  
 へこそなかきところにはとよりけれ  
 つれ——ものすれは思ところ有やうに  
 よの人もをしはからる覧んすくせの  
 ひくかたによりなを——しき事も  
 あり——てなひくわさいとしりひ

## 二九オ

に人わらへなるわさなりやいみしう  
 思のほりねと心にしもえかなはずか  
 きりあるものからすき——しきこゝろ  
 つかはるなちゑさくより宮のうち  
 をいゝて、こゝろにまかせすところせき  
 おほえにていさゝかの事あやまち  
 もあらはかる——しきそしりやあら  
 むとつゝみしにたに猶すき——しき  
 とかをゝいてよにはしたなめられ  
 よをいてたりてなにとかともあらぬ  
 みのほとゝうちとけ心のまゝなるふ  
 るまひなともゝのせらるなこゝろの  
 をのつからをこりぬれはおもひ  
 しつめるへき事のすくせはひん  
 なきとき女の事にてなんかし  
 こき人もみたるゝたくいむかし  
 もおほかりけるさるましき事に

## 三〇オ

こゝろをつけて人のなをもたて  
 みつからもうらみをかれんなむつ  
 のほたしともなりけるとりあや  
 まちてみむ人の我こゝろにかなわす  
 みしのはん事かたきふしあり  
 とも猶おもひかへさふこゝろをなら  
 ひてもしわをやのこゝろさし  
 ありてみゆつりもしはおやな  
 くてよのおほえかたほに人から心  
 おなしうなとあらむひとを方——に  
 よりてもちゑむことをならひ給  
 へなとたゝのとかなるをり——はかゝる心  
 使をゝしへたてまつり給かやう  
 なる御ことにつけてはたはふれて  
 もほかさ の事を思かくるはまたい  
 とあはれに人やりならずおほえ給に  
 もつねよりことにおゝとの御気  
 色もおもひなけきたまへるをは  
 つかしうゝきみとおほしゝつゝめと  
 うゑはつれなくおほしときて  
 なかめすくし給御文はおもひ斗  
 にをりはあはれにこゝろふかささま  
 なるをたかまことにかおもひなから  
 つかへたる人こそあなかちに人のこゝ  
 ろをもうたかふなれあはれとみ給  
 ふゝしおほかり中つかさの宮なん  
 おほ宮にもけしきは見きこゑ給  
 てさもやとおほしかはしきこゑ給

## 三〇ウ

## 三一オ

こゝろをつけて人のなをもたて  
 みつからもうらみをかれんなむつ  
 のほたしともなりけるとりあや  
 まちてみむ人の我こゝろにかなわす  
 みしのはん事かたきふしあり  
 とも猶おもひかへさふこゝろをなら  
 ひてもしわをやのこゝろさし  
 ありてみゆつりもしはおやな  
 くてよのおほえかたほに人から心  
 おなしうなとあらむひとを方——に  
 よりてもちゑむことをならひ給  
 へなとたゝのとかなるをり——はかゝる心  
 使をゝしへたてまつり給かやう  
 なる御ことにつけてはたはふれて  
 もほかさ の事を思かくるはまたい  
 とあはれに人やりならずおほえ給に  
 もつねよりことにおゝとの御気  
 色もおもひなけきたまへるをは  
 つかしうゝきみとおほしゝつゝめと  
 うゑはつれなくおほしときて  
 なかめすくし給御文はおもひ斗  
 にをりはあはれにこゝろふかささま  
 なるをたかまことにかおもひなから  
 つかへたる人こそあなかちに人のこゝ  
 ろをもうたかふなれあはれとみ給  
 ふゝしおほかり中つかさの宮なん  
 おほ宮にもけしきは見きこゑ給  
 てさもやとおほしかはしきこゑ給

## 三二ウ

なるとひとのきこえければおとゝは  
ひきかへしのひてさる事をこそ  
きゝしかなさけなき人のみこゝろ  
にもありけるをちゝおとゝのくちいれ  
給ひしにしふねかりきとて

ひきたかへ給なるへしなとなみた  
をうけてのたまへはひめ君いとはつか  
しきにもなにやかやと思めぐら

し給事はなきにたゝそこはかと  
なくなみたのこほれぬるをかくし

## 三二オ

たなる事おほしてそむき給へ  
るらうたきかきりなしなをや  
すゝみいてゝけしきをとらまし

なとをとゝはおほしみたれてた  
ち給ぬるなこりもやかてはしちかう

なかめ給てあやしう心ちはをく  
れてもすゝみいてつるなみたを

いかにおほしつ覧んなとよろつ  
思る給へるにおほむ文有さすか

## 三二ウ

にてみ給いとこまかにて  
\*つれなさはずきよのつねになり  
行をわすれぬ人やひとに事なる

けしきはかりもかすめぬつれ  
なさよとみるはうけれど

\*かきりとてわすれかたきをわ  
するゝもこやよになひく心なるらん

と有をあやしとうちをかれす  
かたふきつゝみる給へり

## 三三オ

以上である。

この本は、本大学の貴重本目録には「河内本」と記されており、それ故長い間研究対象にされることはなかった。今回の調査で、河内本ではなく別本であることが判明した。異同箇所が多く、とても河内本の範疇に入るとは言えないのである。

鎌倉中期の別本は非常に数が少ない。本学本は、定家の校訂の入る以前の平安期の『源氏物語』本文を伝えている可能性のある貴重な本である。詳しい内容は別稿に譲りたいが、青表紙本河内本にはない内容で一例を挙げると、

## 一八オ

あまりそをれてくせそゝいため  
るさはあるとかの宮とせんさい院

とこゝにこそかき給はめとゆるし  
きこゑ給へはいたうなすかし給そ

このかすにはまはゆやときこえ  
給へはにこやかなるなつかしさは

事ならんものをまんなのすゝ  
みたる程にかむなはしとけな

きもしこそまさるめれとて

であるが、ここは源氏が紫の上相手に、女性達の手の批評をしている場面である。

源氏は、「かの君(朧月夜の尚侍)と前齋院(朝顔の齋院)とここ(紫の上)こそ  
が素晴らしい」と評する。その言葉に対し、本学本では「いたうなすかし給そ」

(「冗談おっしゃいますな」と紫の上の一言が入る。この一文は、今のところ青表  
紙本・河内本等含め他本には見出されていない。また逆に、続けて他本にはある源

氏の言葉「いたうなすくしたまひそ」(そうご謙遜なさいますな)の一文はないの  
である。紫の上の人物像を考える上でも実に興味深い。

加えて末行の源氏の言葉「仮名はしどけなき文字こそまさるめれ」は、他本は  
「仮名はしどけなき文字こそまじるめれ」であり解釈に相異も出てこよう。

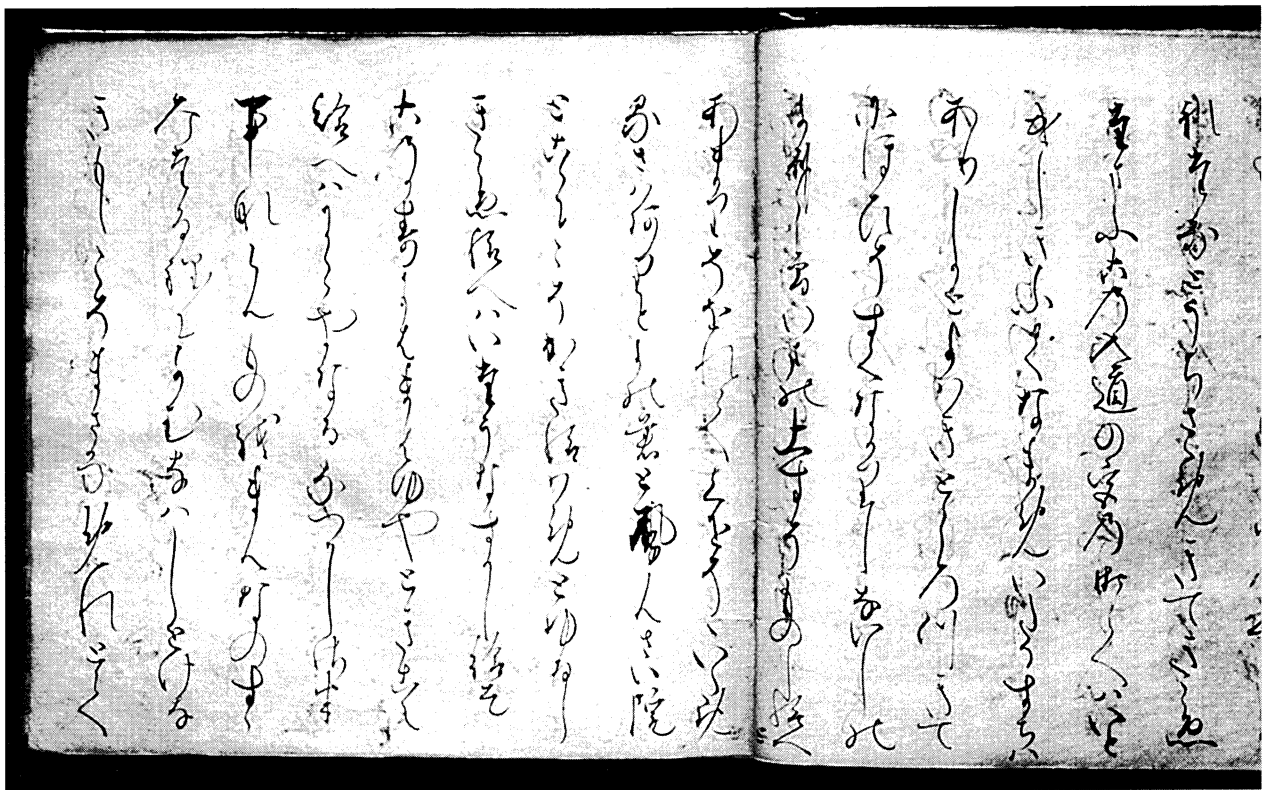
猶、旧中山家本『源氏物語』「わかむらさき」と蓬左文庫所蔵『源氏物語』「松風  
 (注二)」及び『古筆学大成23』「伝民部卿局筆源氏物語切(一) (注三)」とが、本学本と  
 同筆ではないかという示唆を受けたが、和歌の書き出しの位置が異なることもあり、  
 断定は避けたい。ただどれも枡形本でほぼ同じ大きさ、一面九行書きで書写年代や  
 別本という点も一致しており、確かに同筆と言えるほど筆致はよく似ているが、類  
 筆とすべきであろう。

(注一)「伝為家筆梅枝巻とその本文」『古代中世文学論考 第十四集』古代中世文  
 学論考刊行会編 平成十七年五月 新典社。

(注二)池田利夫解題『中山家本源氏物語』昭和四十七年十月 日本古典文学会編、  
 同氏解説(日本古典文学影印叢刊)『源氏物語古本集』昭和五十八年十月  
 貴重本刊行会参照。池田利夫氏、高田信敬氏にご協力賜った。

(注三)小松茂美著『古筆学大成23』図一四四(一五二頁) 講談社。

本学本の書誌や書写年代等の鑑定については、関西大学の田中登氏にご指導を仰  
 いだ。改めて御礼申し上げます。



Reprint of “Tale of Genji-Wumegae volum”

YONEDA Akemi

**Abstract** : It is reprint of “The Tale of Genji-Wumegae volume” in the middle of the Kamakuras age that The Konan women’s college library of what owns so.

**要旨** : この論文は、甲南女子大学図書館に所蔵している、鎌倉時代中期書写の『源氏物語』梅枝の巻の翻刻である。